

生活史からみた「子産み」と「子産み意識」  
 ——現代日本の既婚女性を対象とした事例研究から——

中山まき子

### 1、「子産み」という概念の提唱

子どもを持つことに関する既存の研究では、もっぱら女性の妊娠から出産までの約40週の期間が研究の対象とされ、妊娠以前の生活や意識のありようは抜け落ちたまま論じられてきている。しかし女性個々の立場から見ると、妊娠や出産というできごとは、妊娠以前からのさまざまな生活史の積み重ねの中で生じてくることからであり、妊娠を契機に始まるわけではない。そこで筆者は「妊娠以前の生活史」を含め、妊娠の経過および出産終了（胎盤娩出）までの女性個人の主観的経験世界の全体を「子産み」と表現し、「子産み」研究の必要性を提唱する。具体的には、ある個人が自らの子どもを持つことについて(1)考える、(2)関心を寄せる、(3)具体的に話す・話しあう、(4)計画する、(5)意識化する、(6)行為化する（性行為が行われる）以上のいずれか一つでも生じた時期から「子産み」研究の対象とする。こうした幅広い概念を用いることで、①子を持つことに関する「具体性」と「日常性」を提示しうること、②子どもを持つことに関する研究対象の幅が子を産む女性だけに限定されることなく「産まない・産めない」状況をも含み込むことができること、③女性だけでなく男性をも研究の対象としうることなどが可能になると考える（中山1990）。

### 2、調査方法と調査対象者

そこで筆者は上記の概念に基づき、都市部居住の既婚女性15名を対象として、個人の生活史、「子産み」に関して、家族・夫婦関係、子ども観等について調査を実施してきた。調査手法は事例追跡法による聞き取り調査（調査時期＝1987～1990年、回数・時間＝一人当り最低2～最高9

回・最低3～最高29時間、記録法＝調査時に交わされた会話は可能な限りテープ録音し逐語文字化し再生。録音不可能な語りは記録メモとして文字化）。

こうして得られた少数事例の質的資料を分析・解釈資料とし、現代日本の一般的傾向を探るための仮説提示をめざす基盤作業を行った。現在までに次の3に示す2側面から資料の分析・解釈を行っている。

#### 3-1、事例研究の分析(1)：生活史からみた「子産み」

まず「生活史からみた『子産み』（中山1991）研究では、調査資料の中から、15人の既婚女性に関する生い立ちから妊娠を知るまでの「子産み」過程における特徴や個性を把握した。調査対象者全体の特徴として次のことが分析された。①全員が自分の妊娠の「時期」についてなんらかの計画を持っている。②「時期」の計画には、具体的な時期計画（例：結婚して1年は子どもをつくらないなど）抽象的時期計画（例：仕事が一段落したらなど）がある。③産む時期を計画した人は、二人で決める、または妻が主体的決定者となるなどで、夫の意志で妊娠をした人は一人であった。本調査対象者においては、産む時期の計画に関して、夫の意志の反映以上に妻の意志が強く反映していた。④第1子であっても避妊の実行率は高く、基礎体温などで自分のバイオリズムを把握している人が目立つ。⑤実際に妊娠を知った時の感情については、妻側はその計画との一致・不一致に関わらず感情に個人差があり多様であった。しかし夫側は一様に妻の妊娠を喜んだと妻によって認識されていた。

つまり、妊娠を知った時の受けとめ方について、男女の認識の差の存在が示唆された。今後は男女双方を対象とする調査を行い比較を試みるのが日本人の「子産み」を理解する上で重要な課題だと考える。なお「子産み」過程の個別性および「子産み」に影響を与えている諸要因に関しては中山(1990b)に詳しく示した。

### 3-2、事例研究の分析(2): 子どもを<授かる>・<つくる>意識への着眼

資料分析の第2として、妊娠および出産を経験した女性たちの「子産み」意識を、特に自分の妊娠を知った時についてを語る際の語り口、使用された表現、表現に含まれた意味を、語りの文脈から切り離さずに分析した。具体的には、対象者たちが語りの中で使用していた子どもを<つくる>・<授かる>という表現に焦点を当てた。

その結果、対象者の自発的な語りでは、子どもを<つくる>という表現が頻繁に用いられ、反面<授かる>という表現はほとんど使用されない。しかし<授かる>という表現は自分が妊娠した状況についての詳細な意識を語る手段としては用いられる状況が確認された。しかもこの表現は、対象者によってさまざまな意味で用いられていた。例えば不妊や子どもができないという不安が拭い去れた喜びの意味として、意志や計画通りの妊娠に対する喜びや感動を表す意味として、生殖技術を用いた妊娠と対比し、生殖技術を用いずに妊娠した自分の状況を語る手段として、など9種類の意味を見いだすことができた。使用者はその中のある一つの意味で、あるいは複数の意味を持たせて、<授かる>と表現していた。先行研究が、暗黙の前提としていたと推測される<授かる>の意味は、「妊娠の成立は神仏や大いなる力に願う・頼る・あやかること、あるいは妊娠することは自分ではどうしようもないことだ」(沢村1986ほか)という内容であった。この意味を採用した対象者はむしろ、自分の妊娠は<つくった>結果であることを強調した。

総じて今日用いられる<授かる>という意識は、<つくる>という意識とは指し示している状況・着眼点が異なるものであり「位相が異なる意識」であった。ゆえに両者は対立することなく共存・混在することがあり、各人の意識の中で複合的あるいは単一で、時には対立する関係で存在するなど、ダイナミックな組み合わせを形成していた。また<授かる>という表現は「ことばそのものは変化せず、しかし時代によりあるいはコンテキストに依存して意味を変えるもの」であることも明らかとなった。この発見は翻って柳田門下の日本民俗学が示してきた<授かる>ということばの意味に対して再考する必要性を示したこともなろう。さらに生殖技術を用いた妊娠の可能性が拡大した今日、<つくる>の意味にも変化が生じ始めていた。つまり生殖技術を用いた妊娠の成立が<つくる>ものとなり、生殖技術を用いずに、だが意志と計画に基づく妊娠の成立が<授かる>と表現される現象が起こりつつある。以前<つくる>という意味で用いられた事態は、それ以上に強力な<つくる>操作技術ないしは人為の介入の度合いの差によって<つくる>の意味を失っていく。<授かる>の意味が時代の推移により、あるいはコンテキストに依存して変化するように<つくる>の意味も同種の変化を遂げる可能性が示された(1991a,1992)。

### 4、今後の課題

今後は「子産み」研究の調査対象者を「男女双方」に、妊娠出産した時期を「1980年以前」に、「子を持たない選択をした男女」になど拡大していくことが課題である。

#### [文献]

- 中山まき子。(1990). 既婚女性の子産み意識. お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士論文(未公開)
- 中山まき子。(1991a). <授かる>から<つくる>へという思いこみ. 母性から次世代育成力へ

一産み育てる社会のために一. 原ひろ子. 館か  
おる編、191-196.

中山まき子. (1991b). 生活史からみた「子産  
み」：初めての妊娠を中心に. 目白学園女子短  
期大学研究紀要. 28. 目白学園女子短期大  
学,199-223.

中山まき子. (1992). 妊娠体験者の子どもを持つ  
ことにおける意識 子どもをく授かる><つく  
る>意識を中心に一. 発達心理学研究. 3.  
2. 発達心理学会. 51-64.

沢山美果子. (1986). 近代日本の家族と子育ての  
思想その1：新中間層における教育家族の誕生  
と<童心>主義子ども観. 順正短期大学研究紀  
要. 15. 順正短期大学,5,81-92.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 1. 「子産み」という概念の提唱

子どもを持つことに関する既存の研究では、もっぱら女性の妊娠から出産までの約 40 週の期間が研究の対象とされ、妊娠以前の生活や意識のありようは抜け落ちたまま論じられてきている。しかし女性個々の立場から見ると、妊娠や出産というできごとは、妊娠以前からのさまざまな生活史の積み重ねの中で生じてくることからであり、妊娠を契機に始まるわけではない。そこで筆者は「妊娠以前の生活史」を含め、妊娠の経過および出産終了(胎盤娩出)までの女性個人の主観的経験世界の全体を「子産み」と表現し、「子産み」研究の必要性を提唱する。具体的には、ある個人が自らの子どもを持つことについて(1)考える、(2)関心を寄せる、(3)具体的に話す・話しあう、(4)計画する、(5)意識化する、(6)行為化する(性行為が行われる)以上のいずれか一つでも生じた時期からを「子産み」研究の対象とする。こうした幅広い概念を用いることで、子を持つことに関する「具体性」と「日常性」を提示しうること、子どもを持つことに関する研究対象の幅が子を産む女性だけに限定されることなく「産まない・産めない」状況をも含み込むことができること、女性だけでなく男性をも研究の対象としうることなどが可能になると考える(中山 1990)。